

マレーシア東海岸の村落住民の収入と収入源

—— カンポン・ガロにおけるケース・スタディ ——

坪 内 良 博*

Income and Income Sources among Malay Peasants in the East Coast a Case Study in Kampong Galok

by

Yoshihiro Tsubouchi

はじめに

この報告は1970年10月から1971年9月に至る1年間、西マレーシア東海岸クランタン州において筆者が行なった実地調査の第5報である。調査地 Galok は同州を貫流するクランタン川 (Sungai Kelantan) 左岸のゆるやかな波状の起伏をもった中位もしくは高位の河岸段丘に位置するマレー人集落 (*kampung*) である。調査地の概況はこれまでの報告において述べているのでここでは省略する。本稿の目的は新たにタバコ耕作を導入したゴム・水稲の混合地域における農民の収入の実態とその問題点を明らかにすることである。¹⁾

1 主な収入源

この地域の開拓の歴史は比較的浅い。開拓はクランタン川に沿った部分から手がけられ次第に奥に入りこんでいったと考えられる。クランタン川に沿った Atas Beting や Jabo などの集落は100年に近い歴史をもつのに対し、Galok は約80年前にひらかれたらしい。Galok の立地条件はどのような生業にとっても最適とはいえない。それにもかかわらず人口増加とともに

* 京都大学東南アジア研究センター

1) この調査は京都大学東南アジア研究センターとマラヤ大学経済経営学部によるマレーシア農村調査計画の一部として行なわれた。この調査計画はマレーシアの稲作農村の比較を目的として、社会科学系と自然科学系の研究者の協力によって行なわれた総合的なもので、調査地として、ケダー州、クランタン州、マラッカ州の農村が選ばれた。総合的な報告がいずれ発表される予定である。

本稿の作成に関して竜谷大学教授口羽益生、東南アジア研究センター助手前田成文、辻井博の各氏に多くの貴重なアドバイスをうけた。記して感謝の意を表したい。

なおクランタン州に関する筆者の既発表の報告には次のものがある。

「クランタンの一農村におけるタバコ耕作の導入と社会・経済的变化」『東南アジア研究』9巻4号, 1972. 3; 「東海岸マレー農民における土地と居住」『東南アジア研究』10巻1号, 1972. 6; 「マレーシア東海岸の天水田地域における稲作——カンポン・ガロにおけるケーススタディ——」『東南アジア研究』10巻2号, 1972. 9; 「東海岸マレー農民における結婚と離婚」『東南アジア研究』10巻3号, 1972. 12.

開墾が進められてきた訳である。後期の開墾はクランタン川をずっとさかのぼったジャングル地帯で行なわれ、そこではゴムがほとんど唯一の生産物となるのであるが、Galokのように中期に開かれた地域では人々の生業はきわめて多様な形態をとっているのがその特徴である。主な収入源は天水田耕作と小規模なゴム園でのタッピングであった。ゴムは完全な換金作物であって、今世紀の初頭からクランタンにおける栽培が増加して来た。この意味でGalokは開拓後間もなく貨幣経済の中にまきこまれていったと言える。1968年から導入されたタバコは、価格が著しく低下したゴムに代わって、重要な換金作物としての役割を果たすようになった。水稲耕作、ゴムタッピング、タバコ耕作はいずれも零細な規模で行なわれており、出稼ぎ、やし糖づくり、商売、大工、その他の雑業が収入を補って村人の生活を支えている。以下、Galokにおける収入源の個々について、その特徴を具体的に述べよう。

(1) 水稲耕作

水稲耕作はマレー人にとっては漁業と並んで最も伝統的な生業の一つである。Galokにおける水稲耕作は145世帯²⁾中71世帯において行なわれているが、その実態については既にかなり詳しく報告したので³⁾ここではきわだった特徴だけを述べる。第1は耕作の零細性である。すなわち平均耕作面積は約1.4エーカー(0.57ha)に過ぎない。第2は作付の不安定性である。天水に依存するため作付できない水田が生ずることがしばしばあり、1969/70年度には作付面積は水田面積の64%、1970/71年度(調査年次)には81%であった。第3は反当収量の不安定性である。通常の収穫の場合309 *gantang*/acre⁴⁾が村人によって期待されているが、1969/70年度には124 *gantang*/acre、1970/71年度は220 *gantang*/acreであった。第4は自家消費的な性格である。上述の耕作の零細性および不安定性を背景として、収穫されたもみ米はほとんど売られることはない。

水稲耕作に要する費用の主なものは農器具購入、肥料購入、労賃、および小作料である。また自ら荒おこしを行なう者は牛または水牛の飼育または借入を必要とする。農器具の種類は少なく、木製のすき(M\$10程度)⁵⁾、代かき用具(M\$1.50~3.00)、くわ(M\$3.50~4.00)、稲刈り鎌(M\$2.00~2.50)、脱穀用の桶(M\$10程度)等で、くわ、鎌などの鉄製品を除けば自分でつくることが多い。これらの器具の耐用年数は種類によって若干の相違はあるがだいたい4~6年と考えられる。農器具一式の価格は、くわと鎌を各2個所有したとしても、総計

2) 従来の報告においては、別の家屋に離れて居住する複婚家族をそれぞれ独立世帯として扱ったが、ここでは収入源が一つであるため便宜上これらを一世帯とした。このため世帯数は一世帯だけ減少している。

3) cf. 「マレーシア東海岸の天水田地域における稲作——カンボン・ガロにおけるケーススタディ——」『東南アジア研究』10巻2号、1972.9.

4) 1 *gantang* = 1英ガロン \approx 4.5ℓ、300 *gantang*/acreが、だいたい白米133kg/10アール(0.89石1反)に相当する。

5) M\$3 \approx US\$1(調査当時)

M\$ 35程度である。化学肥料を用いる者は1970/71年度においては全稲作農家の約30%であった。大多数が政府からの割引品を1袋あたりM\$ 6.72で購入している。人手が足りない場合には他人を雇うことがある。荒おこしをトラクター賃耕に依存している農家が3分の1弱を占める。水田1枚あたりM\$ 3とか、1時間あたりM\$ 8とかの形で支払いがなされる。苗束づくり、および田植えの作業に対しては、それぞれ苗1束に対して5¢の労賃が支払われるが、実際には雇用することは少ない。収穫時には手助けをした者に対して5~15 *gantang* 程度のもみ米を与える。耕作に使用する牛は1頭M\$ 130~170、水牛はM\$ 300~350程度に評価される。牛なら2頭、水牛なら1頭を用いることが多い。水牛を借りた場合80 *gantang*、牛を借りた場合には1頭40~50 *gantang* 程度のもみ米が収穫後に支払われるのが通例であるが、収穫が思わしくない場合には話し合いによって減額されることもある。伝統的な小作の方法は *pawah* とよばれる収穫の折半である。小作をしているのは19世帯を数えるが、このうち自小作が13世帯で、小作のみを行なっているのは6世帯に過ぎない。なお、州政府の水田に対する税は、かんがいを欠くこの地域では1エーカーあたりM\$ 2である。

(2) ゴムタッピング

マレーシアにおけるゴムの歴史はせいぜい100年に過ぎないが、Galokのような比較的新しい集落においては、水稲と並んで伝統的な生業であるとさえいえる。Galok居住者が所有するゴム園の総計は158エーカーで、所有世帯数は88、所有者1世帯あたりの平均所有面積は1.7エーカーである。ゴムの木は植えつけてから7年でタッピングが可能となり、30年前後のタッピングの後にリプラントされる。切り倒された老木は薪として用いられることが多い。リプラントングに対しては政府が補助金を与えている。Galok居住者によって所有されるゴム園中51エーカー(32%)は未だタッピングできない若い木である。リプラントングが順調に行なわれず40年以上の樹齢をもつ老木を使用しつづけている例もある。また老木を切り倒したものの未だ若木を植えていない土地が10エーカー弱(6%)ある。老人のもつ土地がこうして放置されていることが多い。かくして実際にタッピングされているのは約97エーカーである。これらのゴム園は自分でタッピングするか、あるいは他人に貸し出されている。このほかに集落外に居住する者のゴム園を借りている者もいる。かくして94世帯においていずれかの世帯員がゴムタッピングに従事している。

ゴムのタッピング作業も稲作と同様、平均1.4エーカーというきわめて零細な規模で行なわれている。雨期にはゴムの幹がぬれているので作業が行なわれない日が多く、主として乾期中にタッピングがなされるが、乾期の一時期には落葉のためラテックスの量が著しく減少する。年間180~200日タッピングするのが標準的なケースと考えられる。タッピングは午前7時頃から行なわれ、午前中にラテックスを凝固させてローラーにかけゴムシートをつくりあげることができる。タッピングの規模が極端に小さい場合には、ゴムは球状にまるめられる (*pot*)。

1 エーカーあたり、平均して1日3～4 *kati*⁶⁾程度のゴムシートを得ることができる。ゴムシートは高床家屋の床下あるいは家屋の付近の日陰で自然乾燥され、隣集落のライセンスをもつ中国人集荷業者、または各戸をまわって来るマレー人の仲買人 (*praih*) に売られる。生産量が多い場合には集荷業者に直接売られることが多い。売却の頻度はまちまちで、最も多い場合は毎日、最も少ない場合は月1回という例があるが、通常月3～5回である。

ゴムは従来非常に有利な生業と考えられて来たが、近時価格が著しく下落してきた。調査期間中において、Galok で生産される4～5級のゴムの価格は1 *kati* あたり M\$.30～.40であった。⁷⁾ 1960～62年頃には M\$.70～.80 もしていたのである。ゴムの価格の低下と、次に述べる新たに導入されたタバコ耕作に労働がさかれることのために、タバコ耕作期間中にタッピングの休止をする者の存在が目立った。

ゴムタッピングのための用具は簡単である。タッピングナイフ、ココナツ殻を半分に割ったラテックス受け、ラテックスを集めるバケツ、ラテックスを凝固させるのに用いる半分に切った石油缶、および簡単なローラーがそのすべてである。ローラーは M\$ 150 前後するが、他の器具はとるに足らない。ローラーの耐用年数は7,8年以上と考えられる。ローラーを有するのは20世帯である。9世帯はローラーを用いない。残りの65世帯は所有者のところへ行ってローラーを借りる。使用料は1カ月につき1日分の収益である。

ゴム園を人から借りる場合にも *pawah* の制度が適用される。収益を所有者と作業者とで折半するのが基本的な方法である。作業者がラテックスを凝固させる酸を自ら購入する場合にはスクラップが与えられる。ゴム園に対する税は、水田の場合よりも高く、1エーカーあたり M\$ 8 である。

(3) タバコ耕作

1968年から M. T. C. (Malayan Tobacco Co.) を通して Galok に導入されたタバコ耕作は不振のゴムに代わって今や村の経済の中心的存在となっている。1968年に64世帯であった耕作者は4年めの1971年には124世帯にまで増加した。最初は水田所有者を中心として耕作が始まったが、現在では土地を持たぬ者も土地を借りてタバコ耕作を行なっている。タバコ耕作の詳細については筆者の別の報告を参照されたい。⁸⁾ そのあらましを簡単に述べると以下のごとくである。

タバコ耕作には乾期中の水田が利用される。当初は原則として1世帯あたり1,000本の耕作が許されていたが、現在ではその枠がひろげられて1期あたり成人1人について1,000本を耕

6) 1 *kati* \doteq 1 $\frac{1}{3}$ lb \doteq 0.61kg

7) また、*pot* とよばれるローラーにかけられないゴムのかたまりは、1 *kati* あたり M\$.15程度であった。

8) cf. 「クランタンの一農村におけるタバコ耕作の導入と社会・経済的变化」『東南アジア研究』9巻4号, 1972. 3.

作することができる。3期に分けられている作付時期のうち、Galokの住民については1970年度までは第1期のみ作付を許されたが、1971年には集落の南半分の者は第1期と第3期に作付できるようになった。かくして1968年には1耕作世帯あたり1,328本であった平均植付苗数が1971年には3,891本にまで増加した。

1,000本の耕作について1/7エーカーの土地が必要である。元来乾期の水田は他人が使用して野菜を植えたりしても、特に小作料はとらなかったのであるが、これはタバコ耕作についても該当し、きわめて少数の例外を除いて土地を持たぬ者は親戚や知人の土地を無料で借用して耕作を行なっている。タバコに与えた肥料が次の水稲耕作まで残効をもつということから、一般に水田耕作者は喜んで乾期の水田を貸し出す傾向がある。タバコの葉が成長すると1日おきに夕方に収穫を行ない、翌朝Galokの集落の中央部にあるM. T. C.のステーションへ運び、簡単な自己選別の後に、係員によって品質査定と計量が行なわれて代金が支払われる。買付け価格は1*kati*あたり最高30¢、最低10¢である。M. T. C.から配布された苗、肥料および農薬の代金がこの中から差し引かれる仕組みになっている。⁹⁾ 1,000本あたり11*pikul* (1,100*kati*)程度の収穫があって、M\$ 250程度の収益が期待されているが、実際には、かんばつ、冠水、病気の被害をうけて収穫はより低い。また、耕作量の増加につれて品質査定がきびしくなってきた。かくして、1968年には1,000本あたりM\$ 162であった収益は1971年にはM\$ 101にまで下がった。ごく少数ではあるが、最後まで耕作せず、途中で他人に売り渡す例もある。これは*jual pakok*とよばれ、成長の度合いに応じて、1,000本あたりM\$ 25からM\$ 120で手離される。

タバコ耕作は荒おこしにトラクター賃耕を利用する場合¹⁰⁾があるほかは自力で行なわれる。耕作のためには何ら特別の器具を必要としないが、近時運搬のために自転車や荷車を購入する者が多くなった。

(4) やし糖づくり (*penyadak*)

1日8~25本のココヤシの木に登って樹液を竹筒に採取し、これを鉄鍋で煮つめてやし糖 (*manisan*)をつくる。でき上がった固型のやし糖は円型の薄板にして、仲買人 (*praih*) または隣集落の中国人商店に12枚につきM\$ 1で売る。ココヤシの木は一部分は自分のものを用いるが、ほかは他人から1本について1カ月50¢の契約で借りる。1日あたりM\$ 3~5の収益をあげることができるが、日に2度高いやしの木に登らねばならないからかなりの重労働である。タバコ耕作が導入される前にはGalokでは14世帯がやし糖づくりに従事していたが、このうち8世帯はタバコ耕作が入ってからこの仕事を完全にやめてしまった。現在6名の者がやし糖づくりを続けているが、うち2名はタバコ耕作期間中は一時的に作業を休む。

9) 1,000本あたり苗代M\$ 1.30、肥料代M\$ 15.60、農薬代M\$ 3.80である。

10) 1,000本の耕作に対してM\$ 5~7が支払われる。

(5) 定期的雇用労働

かなり多くの者が給料または賃金を得て働いている。これらは3群に大別できる。すなわち (i) 月給または日給制で通年的な仕事, (ii) 歩合制で通年的な仕事, (iii) 時間給制または歩合制で季節的な仕事である。

第1の категорияに入るのは, 小学校教師 (月収 M\$ 150~370) 3名, マラリア蚊駆除作業員 (月収 M\$ 100 程度) 3名, 成人学級講師 (月収 M\$ 52), 兵隊 (M\$ 110 が毎月妻におくられる), 灌漑排水局作業員 (月収 M\$ 130), コーヒーショップ店員 (月収 M\$ 60), トラック運転手 (月収 M\$ 100程度), タバコステーション常勤作業員 (月収約 M\$ 50), 各1名である。第2の categoriaに入るのは3名のタクシー運転手であって, 月収 M\$ 50~100 程度を得ている。これら (i) および (ii) の categoriaに属する者は大部分その仕事の場を集落外にもっており, Galok は居住地に過ぎない。

第3の categoriaは, Galok に1968年から開設されたタバコステーションでの労働と関係しており, 30代以下の若年層を中心として男子13名, 女子73名が年間約4カ月のシーズン中雇用されている。雇用者の数は1968年以来増加して来たのであるが, 1971年には Galok においては66世帯が1人以上の賃金労働者を提供していた。男子の場合, 運搬・梱包・警備等が主な職種で1時間45¢が支払われる。女子の主な仕事は出来高払いで, 青い葉を束ねる作業に対して一連あたり 2¢, 乾燥室からとり出した葉をとりほぐす作業に対して1連あたり 1¢, 選別作業に対して1ポンドあたり 4¢ が支払われる。女子のその他の職種として, 選別された葉のチェック, 運搬, 掃除などがあるがこれらに対しては1時間40¢が支払われる。支払いは2週間ごとにまとめて行なわれる。時間給の場合, 1日8時間, 1カ月25日働くとすれば, 男子は月収 M\$ 90, 女子は M\$ 80 を得ることになるが, 実際には処理される葉の量に変動があり, また労働者の数が仕事の量に比して多過ぎるので, 収入はせいぜい M\$ 40~60 に過ぎない。同様の事情は出来高払いの者についてもあてはまり, 月あたりの収入は時間給の作業員にほぼ等しいかそれを下回る程度である。

(6) 稲作のための雇用労働

稲作のための雇用労働については既に稲作の項において, その費用を説明したときに述べた。稲作において雇用が最も重要なのは収穫の作業においてである。自家用の米を得るために Galok に限らず近くの集落まで出かけて雇用される場合もある。1970/71 年度においては18世帯においてその成員が収穫時に Galok あるいはその周辺で雇用されている。収穫時における雇用は, 純粋な意味での雇用というよりは, 親, 親戚, 知人の作業を手助けした謝礼である場合がある。支払いは原則としてもみ米でなされる。雇用の原理が純粋な形で作用した場合には1日 5 *gantang* が支払われ, 手助けの意味が強い場合には相手との関係および耕作者のゆと

りの程度によってときにはより多く、ときにはより少なく支払われる。

(7) 大工・職人

大工（2名）、金銀細工師（1名）、自転車修理（1名）などがこのカテゴリーに入る。大工の仕事に対しては1日 M\$ 3.00~3.50 が支払われるが、仕事は不定期的であって、年間の収益はせいぜい M\$ 200 前後である。金銀細工師の場合、月 M\$ 30 程度の収入がある。自転車修理の場合、日に M\$ 3 くらいになるが、仕事は間けつのである。

(8) 商 売

商売に従事するものを大別すると三つのカテゴリーに分かれる。第1は家屋の一部を店舗として使用するいわゆる商店あるいは飲食店に分類されるものである。第2は屋台店であって、主として食料品や飲食物を扱う。第3は固定した場所を持たぬ行商人である。

第1のカテゴリーに入るのは11軒の商店および4軒の飲食店である。商店は、雑貨、乾物、食料品等を扱うものが多く、飲食店はコーヒー、茶、軽食を提供する。商店・飲食店の数はこの集落の規模に比して多過ぎるが、これはタバコシーズンにタバコステーションを目ざして集まる人々を対象として新規に開店したものを含むためである。売上げ高は店の規模および立地条件によって1日 M\$ 3 から M\$ 50 に至るまで大きな幅があるが、いずれの店でもタバコシーズン中は売上げ高が特に多くなる。利潤は一般商店の場合平均20%程度、飲食店の場合30~50%である。

第2のカテゴリーに入るのは10軒の屋台店で、このうち8軒はタバコシーズン中のみ営業する。この8軒のうち3軒は同時に商店をも経営している。やし油であげたバナナを売るもの3、めしを売るもの2、氷水や飲み物を売る者2、魚を売る者1が上述の8名の内訳である。利潤は20~50%と考えられる。通年屋台店をひらいている者は2名であって、このうち1名は牛を年間10頭ほど屠殺してその肉を売り1頭につき M\$ 10~20 程度の利益を得ている。他の1名は野菜や菓子を扱って日に M\$ 20~30 の売上げ（利潤約20%）を得ている。

第3のカテゴリーには10名の者が含まれる。前述の屋台店の場合と逆にこの中にはタバコシーズン中は商売を休む者がある。10名の内訳は、ゴム仲買人3名、牛の仲買人（前述の牛肉の屋台店をも同時にひらいている）、にわとり仲買人、にわとり仲買兼魚の行商人、にわとりとやし糖の仲買人、魚行商人、布地行商人、ラジオその他の便利屋各1名である。ゴム仲買人は通常1 *kati* について1¢の利益を得て、月間 M\$ 20~70 の収入を得る。牛の仲買人は1頭の売買につき M\$ 10 程度の利潤を得て年間100頭前後を取り扱う。他の種類の仲買人、行商人はそれぞれ毎日、あるいは週数回働いて1日あたり M\$ 2~10 の利潤を得ている。

(9) 出 稼 ぎ

タバコ耕作が導入されるまでは、出稼ぎはこの集落の住民にとって非常に重要な収入源とな

っていた。Galok 住民の出稼ぎの特徴は、第1に若年者が主力を占めていることであり、第2に毎年確実に行く訳ではなく、同一人が行ったり行かなかったりすることであった。タバコ耕作開始以来、出稼ぎに出る者は著しく減少したが、それでも1970/71年度に出稼ぎのため一時的に村を離れた者は10名あった。

最も重要な出稼ぎの種類は収入折半 (*pawah*) の約束によるゴムタッピングで、パハン州へ行く者が多い。1970/71年度における出稼ぎ経験者のうち半数(5名)が、このようにして20日~3カ月の間パハンへおもむいた。M\$ 20~200が彼らのもち帰った収益である。クランタン州内のゴム園地帯へ出かけた者も1名いる。以前はタイ領へ行ってタッピングに従事する者もいた。

ケダー州における水稲の収穫はかつては重要な出稼ぎの対象となっていた。これはケダーとクランタンとの収穫期のずれを利用して行なわれていたのであるが、ケダー州における二期作化の進行が農業暦を変化させたこと、およびこの地域におけるタバコ耕作の導入によって著しく衰退した。1970/71年度には1名を数えるのみである。約1カ月滞在してM\$ 60を持ち帰っている。クランタン州内における稲作地での収穫作業に従事する者も若干おり、1970/71年度には3名を数えた。主としてパシルマス(Pasir Mas)の対岸のSalor地域へ行き、1週間から10日滞在して働く。収入は1日あたりもみ米5 *gantang* である。

(10) 地代および家賃

Galok にはいわゆる大地主は全く存在しないが、小規模の土地の貸借はかなり多く見出される。男女に対して均分的な傾向をもつ相続方法と婚姻後の居住地の選択に関する系譜的な規則の欠如とが居住地に遠い土地所有を生み出すことと、夫婦を中心とする世帯構成が高齢者の土地利用に関する労力の不足を生み出すことが零細な土地貸出しの現象の主な原因となっている。¹¹⁾ かくして、水田を貸出している世帯39, ゴム園を貸出している世帯17を数えることができる。水田の小作料は既に述べたように収穫されたもみ米の折半の方式をとっており、1970/71年度において各々の零細地主は最高400 *gantang*, 最低5 *gantang* のもみ米を現物で受け取っている。ゴム園に関しても得られた収益の折半がなされるが、この場合は地主またはタッパーのいずれかが現物を売って現金を折半する。1970/71年度においては最高M\$ 735, 最低M\$ 15 が得られている。

Galok に一時的に居住する小学校教員や、M. T. C. のステーションに通う作業員のために間貸しをする者が4名ある。家賃は1カ月あたりM\$ 5~12である。家の前にトタン葺きの小さな店舗、あるいはごく簡単な屋台店をつくって、タバコシーズン中、町から入りこむ商人に賃貸する者が3名ある。トタン葺きの店舗の場合1カ月 M\$ 10~20, 屋台店の場合1日30程

11) cf. 「東海岸マレー農民における土地と居住」『東南アジア研究』10巻1号, 1972.6.

度である。また、商店をひらく目的で借地をした者から地代として1年あたり M\$ 30 をとっているケースが1例だけある。

(ii) 果樹からの収入

商品価値のある果実のうち主要なものは、ドック (*duku*) とドリアン (*durian*) である。これらは主として家敷用地に生育する果樹から得られるもので、特定の季節に仲買人に売ることによって現金を得る。ココヤシの実、バナナなども不定期的に売られることがあるが、これらは主として自家用にあてられているので換金量はごくわずかである。1970/71年度においてはドックを売った者9名、ドリアンを売った者2名がいた。ドックを売ることによって M\$ 20 ないし M\$ 250 の収入を、ドリアンを売ることによって M\$ 15 ないし M\$ 50 の収入を得ている。果樹からの収入の問題点は、これらの果実の産量がきわめて不安定で、ときには数年続けて実を結ばぬこともあることである。

(ii) 牛・水牛の売却

Galok においては牛 (*lembu*) や水牛 (*kerbau*) は農耕用にも使用されているが、肉牛として売却することを目的として飼育されることもある。一世帯あたりの飼育頭数は通常1~2頭で、最も多くても仔牛を含めて4, 5頭である。これらの家畜は自分の飼育する親牛の出産、あるいは他人の牛を世話することにより仔牛のうち1頭を自分のものとする *pawah* の制度を通して得られた場合が多い。生育にともなう利潤を得るために仔牛を購入する場合もある。仔牛ならば M\$ 50~100, 屠殺用の成牛は M\$ 130~200, 例外的に大きな雄牛は M\$ 300~350 で売買される。水牛の若牛の場合、M\$ 170~200, 成牛で M\$ 300~350 程度である。牛の飼育による利潤は、売買の際のかけひきによってかなりのひらきができるが、1日あたりの飼育に対して1頭につき20~30¢ であるといわれている。1970/71年度において牛を売却した者は16名、水牛を売却した者は4名数えられた。前年度におけるタバコ・水稲の不作を背景として、この数は例年よりやや多いといえる。水牛や牛はこのような意味で困窮時における換金の手段ともなっている。

(iii) その他の収入源

上記のほかにも多くの収入源を数えることができるが、それらは従事している人数が少ないか、あるいは収入がわずかに過ぎないような種類のものである。以下、これらの若干を列挙し、ごく簡単な説明を加えることにする。

- (i) 理髪師：3名の者がきわめて簡単な道具を使って男子の整髪を行なっている。料金は大人50¢, 小人30¢で、月収は M\$ 30~40 程度である。
- (ii) 輪タク運転手：自転車の前に客のすわる台をつけた *teksi* とよばれる輸送機関の運転をする者が4名いる。*teksi* はパシルマス郡では許可制となっているが、田舎で用いられる

- ものはすべて無登録である。タバコシーズンを中心として営業する。オフシーズンには1日あたり50¢からM\$2の収入に過ぎないが、タバコシーズン中にはM\$10を越えることもある。4名のうち3名は自分の車を用いるが、他の1名は他人から借りて利益を折半する。
- (iii) 薪炭の製造：地面に穴を掘ってその中で炭を焼き、パシルマスの商店に売る親子がいる。1回あたりM\$90~190の売上げ（原料費はM\$10~15程度）を得るが、1970/71年度はタバコ耕作を重視したため1回しか炭を焼かず、M\$120を得るにとどまった。同じ親子がまたM. T. C.の燃料用に薪を切り出してM\$100を得ている。老齢化したゴムの木をM. T. C.に売却しM\$100を得た者も1名いる。
- (iv) 呪医：*bomoh* とよばれる呪医が1名おり、病気の治療を行なう。1回についてM\$1程度（最高M\$5）の謝礼を受け取り、1カ月M\$30~40を得ている。
- (v) 産婆：Galokには産婆（*bidan*）が2名いる。1回の出産に対しM\$1~4の謝礼をうけとり、年間M\$20~30の収入を得る。このほかに子供をとりあげてもらった親が断食明けの時期に白米1 *gantang* あるいはそれに相当するM\$1.20の現金をおくる。
- (vi) 仕立て裁縫：ミシンを用いて衣服やマットレス（*lembek*）をつくる者が3名いる。うち1名は *pondan* とよばれる男子の性倒錯者（32才）で、1カ月M\$30~40の収入を得ている。他の1名は60才の老婆で月収M\$10~30、最後の1名は小学校教師の妻で月収M\$5程度の内職である。
- (vii) コーラン教師：子供達を集めてコーランの読み方を教えている者が2名いる。いずれも十数名を教え、*fitra* として1 *gantang* の米、あるいは相当額の現金M\$1.20を受け取る。
- (viii) 菓子づくり：マレー風の菓子をつくる者が3名いる。うち2名はタバコシーズンだけ週3~4回作業を行ない、1回についてM\$1程度の収益を得る。他の1名はほとんど毎日少量の菓子をつくって、隣人の経営するコーヒーショップに置き1日30¢程度の収入を得ている。
- (ix) 野菜づくり：各種の野菜や西瓜などをつくって村人に売る者が4名いる。うち2名は年間M\$150~200の収益を得ているが、他の2名の場合はきわめて小規模かつ臨時的であって、年間M\$15~20を得るに過ぎない。
- (x) ローラー賃貸し：ゴムのシートをつくるためのローラーを自ら使用すると同時に他の者に貸している者が11名いる。賃貸料は既に述べたように1カ月の使用に対して1日分の製品である。1カ月あたり9 *kati* 以下を得るに過ぎない者が5名、10~19 *kati* を得る者が2名、20 *kati* 以上を得る者が4名である。

Ⅱ 住民の収入

(1) 収入の把握に関する諸困難

いわゆる発展途上国の農民について共通にいえることであるが、Galokにおいても住民の収入を、とくに個別的な世帯のレベルにおいて正確に把握することはきわめて困難である。次に列挙するような事情がこの作業をむずかしくしている。

- (i) 収入の不安定性：既に述べたようにこの地域の農業の天水依存性は毎年の収量にきわめて大きな変動を与える。またゴムの価格の低下は近時かなり著しい。このため特定年次の収入が例年のそれを代表するとは言えない。
- (ii) 収入回数の頻繁さ：ゴムタッピング、タバコ耕作、タバコステーションでの労働、商店での売上げ、大工からの収入などにおいては現金が得られる回数がかかなり頻繁であり、かつ年間における変動が著しい。読み書き計算能力に乏しい農民にこれらの収入の完全な集計・記憶を期待することはほとんど不可能である。
- (iii) 収入源の多様性とその断続性：既に述べたように住民の収入源はかなり多様であって、しかも各世帯が複数の収入源を有している。主な項目についてはチェックリストを用いるとしても、被調査者が自分の収入源に関してもれなく情報を提供してくれたかどうかは保証の限りではない。
- (iv) 報酬の状況依存性：原則として標準的な報酬はきまっても、既に若干の具体例として述べたように、それは個別的な事情あるいは話し合いによって変更されることがある。
- (v) 自家消費量の不明確さ：とくに野菜、果物、ココヤシの実、キンマの葉、鶏、あひる、鶏卵および家鴨卵、山羊、羊等が自家で生産されかつ消費された場合、その評価額は収入に加えられねばならないが、この作業は実際にはほとんど不可能である。¹²⁾
- (vi) 厳密な意味での所得算定の困難さ：とくに減価償却を含む形での所得計算の方法をここに採用することはほとんど不可能である。

(2) 収入源別にみた住民の収入

上に示したような問題点の存在を認めつつも、1970年11月から1971年10月というやや変則的な期間について、Galokの住民のおおよその収入の状況が、1世帯あたり平均4回からなるき

12) Galokで飼育されている山羊 (*kambing*) および羊 (*kambing biri-biri*) は計79匹、にわとり225羽 (ほかにひよこ540羽)、あひる109羽 (ほかにひよこ9羽) であった。ひよこを除いた場合のこれらの評価額はM\$2,868程度である。このうち2分の1が1年間に消費されるとすれば、1世帯平均M\$10となる。鶏卵の年間生産量は1羽 (ただし雄雌を無視して計算) が年間100個を生むとすればM\$2,250、1世帯平均M\$15.5となる。ココヤシの実は1世帯が年間100個を得るとしてM\$15、野菜・果物の生産はとるに足らないが仮に1世帯平均M\$20とすると、合計して1世帯あたり多目にみてM\$60程度が見おとされることになる。

きとり調査によって把握された。¹³⁾ 1971年10月はちょうどタバコシーズンが終わった時期にあたる。

それぞれの収入源別にみた住民の収入は表1のごとくである。タバコ耕作による収入が住民の全収入の約30%を占め、これに賃金労働の重要な部分を構成する M. T. C. ステーションにおける労働からの収入 (M\$ 16,230) を加えると、住民の収入の40%が直接タバコ耕作の導入に関連して得られている。さらに、商売による収入のかなりの部分はタバコ耕作の導入にともなって増加したものである。

ゴムタッピング、やし糖づくり、出稼ぎ等に関連する収入は、ゴム価格の下降およびタバコ耕作への転換のために、絶対額としても減少して来たのであるが、その相対的なウェイトは著しく小さいものになった。タバコ耕作の導入によって生じた収入の増加は、これらの従来の生業からの収入の減少をはるかに上廻っている。Galok における生業構造の変化はこのような形で生じたのである。

(3) 世帯収入

既に示した数値から1世帯平均年収は M\$ 1,076、月収に換算して M\$ 90 であることが分かる。しかしながら、住民の生活程度、階層構造、その他の社会生活を理解するためには、世帯

表1 収入源別総収入 (1970.11~1971.10)

収入源	収入	%	動向
	M\$		
タバコ耕作	48,304	31.0	+
定期的雇用労働	36,766	23.6	+
{M.T.C. に関するもの	{16,230	{10.4	{+
{その他	{20,536	{13.2	{+
商売	24,771	15.9	+
ゴムタッピング	16,847	10.8	-
水稲耕作*	7,044	4.5	±
地代・家賃*	5,365	3.4	±
やし糖づくり	4,353	2.8	-
牛・水牛の売却	3,370	2.2	±
大工・職人	2,070	1.3	±
果実の売却	1,120	0.7	±
出稼	565	0.4	-
稲作労働*	499	0.3	±
その他	4,943	3.1	-
計	156,017	100.0	

* もみ米による現物収入の場合、1 gantang = M\$.50 として計算

13) 筆者の滞在は1971年9月までで、第3期におけるタバコ耕作からの収入に関するインタビューは、現地での助手 Wan Junoh によってなされた。

収入を平均値としてではなく、各個において把握し、その分布状況を知ることが重要である。この場合、Galok における世帯の特性をあらかじめ知っておく必要がある。世帯構成の特質は既に結婚・離婚を論じたときに詳説したのでここでは詳しく述べないが¹⁴⁾、要するに一組の夫婦を中心としつつも、他の一時的・付加的な要素をも容易に受け入れて生計単位が形成されるのがその特徴である。一軒の家屋に居住していても収入・支出を別に行っている場合、それぞれを独立世帯として扱くと、1世帯平均人員は4.7人であって、このうち平均2.4人が何らかの収入をとまなう仕事に従事している。

Galok における家族の集団としての枠の弱さは、世帯を扱う場合に次のような問題点を生ぜしめる。

- (i) 個人主義的な傾向がかなり著しく、家族の共同労働以外から得られた収入は、個人の収入としての性格を強く有している。とくに未婚の息子や娘の収入は偶発的にしか家計に寄与しない場合が多い。かくしてここに現われる世帯収入は個人の収入の合計に過ぎない側面を有することがある。
- (ii) 離婚やひきとりを通して世帯員の移動がかなり著しく、それに応じて世帯収入が急変する可能性がある。
- (iii) 親の家に同居する子の夫婦の世帯帰属をめぐって世帯収入が変化する。子の夫婦は結婚の初期には親と同じ世帯に属するが、数年の後には同じ家に住み続けても経済だけは別にする事が多くなる。かくして、両者を合わせた状態における世帯収入と、分離後の各々の世帯収入とは生活程度の変化をほとんど生じないままでかなり大きく異なる場合がある。
- (iv) 老人が子からの援助を受けながらも、独立して別家屋に居住し、別炊の生活をおくっている場合がある。
- (v) 複婚家族においては、かまど (*dapor*) に関しては二人の妻がそれぞれ独立を保つが、収入源は同一で分離不可能な場合が多い。かくして複婚家族の場合の世帯概念はやや複雑となる。¹⁵⁾

既に示した収入把握上の難点と上述の世帯概念における難点を認めつつも、Galok における世帯別収入の分布を、世帯員数を考慮しながら示すと表2のごとくとなる。世帯収入分布上の第1の特徴は、極端な高収入世帯が存在しないことである。最高額といえども年収 M\$ 4,585に過ぎない。年収 M\$ 2,500 以上が5世帯存在するが、これらは主な収入を小学校教師の給料(2名)、あるいは商売(3名)から得ている。既に別の報告で述べたように、均分相続的傾向のために、世代を越えた財産の蓄積はほとんど不可能なのであって、土地に依存する生活である限り、高い収入は望み得ないのである。第2の特徴は世帯員の数に従って収入の増加がある

14) cf. 「東海岸マレー農民における結婚と離婚」『東南アジア研究』10巻3号, 1972. 12.

15) ここでは収入を扱う便宜上その例外性を認めつつ1世帯として扱った。

表2 世帯収入および世帯員数別にみた世帯数

世帯員数 収入	1~2	3~4	5~6	7~	計
M\$ ~ 499	13	15	4	1	33
500~ 999	7	18	15	5	45
1,000~1,499	2	12	12	13	39
1,500~1,999		4	5	3	12
2,000~2,499			4	7	11
2,500~2,999		1			1
3,000~3,499		1		2	3
3,500~3,999					
4,000~4,499					
4,500~4,999				1	1
計	22	51	40	32	145
平均収入	M\$ 506	M\$ 918	M\$1,171	M\$1,616	M\$1,076

程度認められることである。先に挙げた比較的収入の高い5世帯を除くとこの傾向はさらに顕著になる。世帯員数の多さは世帯内の労働力の多さに結びついている。労働力の多さが総計としての高い収入をもたらす可能性があるが、表3はこの事実を裏付けている。このことはその収入が土地依存的というよりはむしろ労働力依存的という貧しい農村経済の特色を示す。タバコ耕作の導入はこの傾向をさらに著しくしたと考えられる。

世帯収入を世帯主の性・年齢階級別にみると表4のごとくとなる。60才以上の男子世帯主、

表3 世帯収入および労働従事者数別にみた世帯数

労働従事者数 収入	1	2	3	4	5	計
M\$ ~ 499	12	17	3	1		33
500~ 999	3	28	11	3		45
1,000~1,499	1	18	11	7	2	39
1,500~1,999		5	5	2		12
2,000~2,499		3	4	3	1	11
2,500~2,999		1				1
3,000~3,499		1	1		1	3
3,500~3,999						
4,000~4,499						
4,500~4,999	1					1
計	17	73	35	16	4	145
平均収入	M\$ 596	M\$1,009	M\$1,263	M\$1,293	M\$1,964	M\$1,076

表4 世帯収入および世帯主の性・年齢階級別にみた世帯数

収入	性		男					女					計
	年齢階級		20	30	40	50	60	20	30	40	50	60	
			29	39	49	59		29	39	49	59		
M\$													
～ 499			7	3	2	2	6			1	6	6	33
500～ 999			11	10	6	8	4			1	2	3	45
1,000～1,499			6	8	13	7	2		1	2			39
1,500～1,999				5	5	1	1						12
2,000～2,499				4	1	3	3						11
2,500～2,999				1									1
3,000～3,499				2		1							3
3,500～3,999													
4,000～4,499													
4,500～4,999				1									1
計			24	34	27	22	16		1	4	8	9	145
平均収入			M\$818	1,543	1,138	1,230	992		1,004	873	336	396	1,076

および50才以上の女子世帯主の世帯において、最も低い収入を得ている者の存在が目立つ。この現象は、とくに高齢者あるいは女子が若い夫婦と共住しない場合に現われ易いのであって、これもまた労働力の問題にある程度還元できる。若年層においても収入の低い世帯の存在が目立つが、これは妊娠・生産・育児のために妻の労働力が十分活用されないことと、生活の基礎となる土地を全く所有しない者があることとに関連している。とくに後者に注目すれば、収入は単に労働力だけから決定されている訳ではないといわねばならない。土地と労働力を得た壮・中年層の世帯においてある程度の収入が確保され、いずれかを欠く若・老年層に収入の低さが見られる。収入と家族のサイクルとのむすびつきをここに認めることができるのである。

Galok の住民の居住形態は既に別の報告で詳しく述べたが、大別すると、同一または隣接する屋敷地内に親子・きょうだいを中心とする複数の世帯が共住する場合と、近隣に親族関係を有しないで居住する場合（単独居住）とがある。後者は屋敷地を相続したり購入することによって、あるいは他人の土地または家屋の一部を無料（*tumpang*）あるいは有料（*sewa*）で借りることによって発生する。それぞれの世帯がそれぞれの状況別にみた場合どの程度の収入を得ているかは表5に示す通りである。ここでとくに注意すべき現象は、同一の屋敷地内に共住する場合に M\$ 299 以下の低収入の者がとくに多く含まれていることである。これらは高齢者あるいは独立して間もない若齢者である場合が多く、同じ屋敷地に共住する親族にある程度依存しながら生活を営んでいる。既に述べた高齢者および若齢者における収入の低さがこのような居住のあり方によって補われているのである。

表5 居住状況および収入別にみた世帯数

収入	居住状況	同一屋敷地または同一家屋内共住	単 独 居 住				計
			相続	購入	<i>Tumpang</i>	<i>Sewa</i>	
M\$							
～ 299		11		1	1		13
300～ 499		14	3	1	1	1	20
500～ 999		33	7	1	3	1	45
1,000～1,499		28	4	3	4		39
1,500～1,999		6	3	1	1	1	12
2,000～2,499		8	1	2			11
2,500～2,999		1					1
3,000～3,499		1		1		1	3
3,500～3,999							
4,000～4,499							
4,500～4,999				1			1
計		102	18	11	10	4	145

(4) もみ米 (*padi*) による現物収入とその意味

Galok における稲作は、しばしば稲作農家の自家消費を支えるにも十分ではない零細な規模において営まれている。また収量はその年の雨のふり具合によってかなり大きく変動する。これらのことを背景として、もみ米はほとんど売られることがなく¹⁶⁾、仮に1年間の消費分を上廻る収穫があったとしても、それは翌年来るかも知れない不作に備えて保存される。自ら水稻を耕作しない世帯にとっては水田の地代、あるいは刈取り作業の報酬としてもみ米をうけ取り、それが自家消費に用いられる。かくしてもみ米自体はほとんど現金化されることなく流通し、消費される。¹⁷⁾

現物としてのもみ米が各世帯にどの程度入って来るかを、耕作・地代・労賃という収入の形態の組み合わせ別に観察すると表6のごとくとなる。全住民の77% (111世帯) が現物としてのもみ米を収入の一部としている点に注目すべきである。しかしながら、その平均は1970/71年度においては190 *gantang* で、成人2人の消費量に過ぎない。既に述べたように、Galok 住民における1970/71年度の作付面積は水田面積の81%、単位面積あたり収量は通常期待され

16) 1970/71年度においては、500 *gantang* 余の収入のうち100 *gantang* を売却したケースが一例だけ例外として存在する。

17) もみ米ではなく白米 (*beras*) の形をとった流通・交換は、断食明けの *fitra* として家族員1人1 *gantang* を政府または貧乏人に出すことを義務づけられていたり、婚礼の祝宴に招かれた人が1～2 *chupak* (1 *chupak* = 1/4 *gantang*) を持参するというような形で、儀礼的な意味において重要であるが、Galok のような米不足の地域では、これらは名目だけをとどめて現金化されることによってある程度形がい化している。

量の71%であった。耕作・地代・労賃ともに収穫量に比例して増減すると仮定すると、順調な収穫が得られた場合には成人3～4人を養うだけの収入が期待できるが、このような状況は必ずしも毎年生じる訳ではない。また23%の世帯は自家消費用のもみ米を全く入手していない。かくして Galok におけるもみ米の供給は慢性的な不足状態にある。この不足分はクランタン川下流部の米どころからパシルマスの市場へと運ばれる精白米を購入することによって補

表6 Padi 現物入手方法および入手量別にみた世帯数

入手方法	Padi の量 (gantang)									計	平均
	49	50	100	200	300	400	500	600	700		
耕作	6	3	12	22	10	2	2	1	1	59	236 gantang
地代	8	7	4	8	1					28	111 gantang
労賃	5	4	1		1					11	70 gantang
耕作 + 地代			3	3		2	1			9	281 gantang
耕作 + 労賃			2							2	180 gantang
労賃 + 地代			1							1	120 gantang
耕作 + 労賃 + 地代				1						1	290 gantang
計	19	14	23	34	12	4	3	1	1	111	190 gantang

われる。米を買うためには現金支出を必要とするが、従来の住民の生活においては、もみ米現物による収入を通して、この意味での現金支出をさげようとする傾向が強かったように思われる。前掲の表6から分かるように、地代あるいは労賃として得られるもみ米の量は 100 gantang 未満の場合が多く、きわめて零細である。それにもかかわらず、もみ米による収入は零細な現金収入を背景として自家消費を目的とするがゆえに重要であったのである。

おわりに

マレー人の一農村における収入のあり方を以上に提示して来た。このような状況は当然調査地のおかれた地理的・生業的環境に大きく依存している。クランタン州における農村が、(i)クランタン川河口部の平地における安定した稲作地帯、(ii)やや奥に入ったゴム・水田の混在地帯、(iii)クランタン川上流のゴム園を主体とする新開拓地域に大別できるならば、ここに示した経済の特徴の多くは第2の地域のみ該当する。この地域はオリジナルな平野部の生業様式を部分的にとどめている中期の開拓村として把握できる。そこにおける生業はいずれをとってもとくに有利な形では展開しないが、いずれも営むことが可能である。かくして収入源の多様性と収入の不安定性とが同時にこの地域に現われる。またこのような生業上の特色のために、この地域ではタバコ栽培をはじめとする収入源の変化をうけ入れることが容易であった。

かんがい設備の欠如を背景としてこの地域に顕著に現われる各年の収入の不安定さは、農民に一つの適応形態を生ぜしめた。それは家計にとっての決算が必ずしも1年で完結しないという状態である。すなわち住民は、余裕がある年には来たるべき消費を目的として残し、不足が甚だしい年には水牛・牛の売却、あるいは貴金属の質入れを通して次の年までくいつたぐるのである。¹⁸⁾

住民の収入の分布に関する階層差の小ささは、相続のあり方を通して、農業的な生業に依存する限り世代を越えた富の蓄積が困難であることに起因しているように思われる。¹⁹⁾ 商業活動その他を通して一代で蓄えられた財産は、土地購入という形をとって少なくとも一時的に大地主を生み出し得るとしても、それはこのような中間的な地域では必ずしも顕著には現われず、とくに Galok では全く存在しない。このことは、この集落において財力を背景とする強力なリーダーシップが生じないことに関係して来るのである。

18) 中国人の商業活動が著しく発達しているならばこのような状況は農民における大きな負債の問題をひきおこすかも知れない。幸か不幸かこの地域の中国人の活動はそれほど強くない。

19) cf. 「東海岸マレー農民における土地と居住」『東南アジア研究』10巻1号, 1972. 6.